

地元を愛する若き経営者が取り組む、和歌山の魅力創出というチャレンジ。



TAMURA TADAYUKI
阪和ホールディングス株式会社 代表取締役社長

田村忠之

1983年生まれ、PL学園高校を卒業後、米国留学を経て父が経営する阪和総合防災に入社。20年は社長就任。同年、阪和ホールディングスを設立し、阪和総合防災、第一電機設備工業、紀和商店、瀬戸内工業所、エンスイ工業を子会社化。事業を通じた、地元・和歌山の魅力抽出を目指す。

父が創業した、商業施設の空調や消防、水道などの設備工事を行う阪和総合防災を2020年に継承し、同年に阪和ホールディングスを設立。阪和総合防災に加え、電気工事を主な事業とする第一電機設備工業と、コンクリート用骨材や砕石などを扱う紀和商店をグループに迎え、資材調達から設計施工までをワンストップで提供できる体制を構築した田村忠之氏。

そんな田村氏が公言し続ける目標が、企業経営を通じて自らの地元である和歌山を発展させ、地域を豊かにすることだ。高校時代は、数々のプロ野球選手になるという夢を追い、高校卒業後にはアメリカにも渡った。しかし怪我也もあって夢を諦め、父の会社に就職。現場で仕事を覚えながら、ときには創業者の父とぶつかりつつも旧態依然とした経営を見直し、次代を見据えた企業となるべく戦略的な方針転換を実行した。

「学生時代は、野球で心身を鍛えるだけでなく、さまざまな本も読みました。また、幼い頃から将棋が好きで、物事を俯瞰的に見る癖がついていたことも、経営戦略を考える際の役に立っていると思います」。田村氏が事業を承継した後

は、和歌山県内の防災事業で2年連続売上ナンバーワンを達成。確固たる地盤を築くとともに、岡山で船舶部品の製造・加工を行う瀬戸内工業所や同県の造成・土木・管工事を行うエンスイ工業を子会社に加えるなど、グループの拡大を目指した戦略的なM&Aも加速させる。「父の時代には会社の経営が厳しいときもありましたから、何とか会社を立て直して自分が豊かになりたいというところからスタートしました。その後、経営状態も良くなり自分も社員もある程度は豊かになれたので、次は自分が生まれ育った地域やそこに住む人たちが、そこにある会社のことを考えるようになったのです」。

和歌山県は、1995年から年連続で人口減少が続いている。特に都市部へ流出する若者の減少は深刻な課題となっているが、「そこで警鐘を鳴らしているだけでは問題の解決にはならない」と田村氏は言う。「だからまずは自分たちが、若者が働きたいと思える魅力的な会社をつくって、そこから和歌山を変えていこうと。そのためにも会社をホールディングス化して、和歌山だけでなく近畿や関西圏を始め、賛同してくれる全国の企業に仲間になってもらい、グループとしてのスピードな成長と拡大を目指すことにしたのです」。

「M&Aにはシナジーが大切だという人もいますが、最短距離での拡大を目指す当社の場合は、まずはシナジーよりも収益力や確実性があるかどうかを重視します。そのうえでグループに入ってもらえたら、親会社と子会社という関係性ではなく、兄弟会社として一緒に成長を目指すして並走していく。シナジーを出したいからと会社のいいところを変えるのはもったいないし、たとえそれぞれの会社はそのままでも、異業種間でのアイデアの交換や人材の交流など、後でシナジーはいくらでも生み出すことができます」。

グループの拡大に伴って事業領域の幅も広がり、和歌山県の内外から多彩な人材が集うようになった。「会社としての幅も広がっているので、異業種の人材もどんどん採用しています。最近では

県内の地場セネコンを辞めて当社に来た人もいましたし、たとえば商社出身の人やコンサルの人などを採用し、彼らに経験を活かしてもらうために新しい部署をつくることもあります。私がよく社員に話すのは、人生の主役は自分自身だということ。会社としては、それぞれの社員が主役として活躍できる場所を用意したいと思っていますし、社員が個性を活かして活躍するための「場」としても、グループ会社は今後も増やしていきたいと考えています」。

阪和ホールディングスの成長とともに、今や30代の経営者としては、和歌山県内で圧倒的な存在感を發揮している田村氏。すでに事業を近畿一帯へと広げ、今後は西日本一帯への拡大も目指していく。その先を目指すのはもちろん、和歌山の発展であり変革だ。「以前は同じことを考えていても、実績も資本もなく、説得力や発信力がまったく足りていませんでした。そこから数年が経ち、社員の皆のおかげでグループも着実に成長し、自分自身も『この考えは間違っていないんだ』と、進むべき方向により自信を持てるようになりました。このままグループを拡大してまずは10年後、和歌山にはない大規模商業施設を建設したい。今後も、遠回りに見えるかもしれませんが、私たちがとっては最短距離の方法で、各グループの地域に根付いた発展や変革、そして魅力の創出に貢献していきたいと考えています」。

CHALLENGER

The Extra Edge
世の中のトレンドをリードする
話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介